

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520259

研究課題名(和文) 助詞・助動詞・構文・文章構成を観点とした、三代集の表現研究

研究課題名(英文) Research into the expression of Sandaishu in terms of postpositional particles, auxiliary verbs, sentence structure and construction of sentences

研究代表者

小池 博明 (KOIKE, HIROAKI)

長野工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号：30321433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古今集の表現と一括される三代集の表現を、助詞・助動詞・構文・文章構成を観点として考察した。その成果として、以下の点をあげることができる。

第1に、古今集から後拾遺集および拾遺抄の文末語と句切れのデータベースを、私家版ながら作成し、和歌の表現研究を効率的に行えるようにした。第2に、初句切れの表現構成を明らかにした。第3に、文末「らむ」と句切れとから、倒置的表現による体言止めの歌の形成過程の一端を明らかにした。第4に、三代集各に特徴的な詠歌の場が、「疑問詞……らむ」の用法に差異をもたらすことを明らかにした。第5に、三代集の「……ものは… …なりけり」構文の展開を明らかにする端緒を得た。

研究成果の概要(英文)：The following is the product of my research into the expression of Sandaishu in terms of postpositional particles, auxiliary verbs, sentence structure and construction of sentences.

First, I made up private database of terms at the end of sentences as well as of punctuations of phrases in Kokinshu, Goshuishu and Shuishu, to make research into expression of Waka efficient. Secondly, I cleared the structure of expression of beginning of phrases. Thirdly, from “ram” at the end of sentences as well as from punctuation of phrases, I cleared a part of the process of the formation “Taigen-dome” by inversion. Fourthly, I made clear that situations in composing poems characteristic of each Sandaishu; made a difference to the way of using of the phrase “interrogatives … ram”. Fifthly, I cleared the development of constructions of the phrase “… mono wa … nari keru” in Sandaishu.

研究分野：国文学

キーワード：古今集 後撰集 拾遺集 後拾遺集 表現 句切れ 構文

1. 研究開始当初の背景

昭和40年代から本格的に始まった平安和歌の表現研究は、大きな成果を挙げてきた。ただ、その対象は歌枕・歌ことばと修辞とで、そのほとんどは自立語である。自立語の表現研究が成熟した今、自立語に加えて付属語も対象とした研究段階を迎えている。

素材が限定される和歌は、よく言われるように「何」を詠むかではなく、「どのように」詠むかが肝要である。国語の場合、「何」すなわち事から(素材)を表すのは自立語であり、「どのように」については、付属語が決定的なはたらきをする。歌枕・歌ことばの豊かなイメージは、付属語の巧みな使い方で、効果的に表現されたのである。歌論で「てにをは」が重視されたり、限定された素材が典型的に詠まれる和歌にも、秀歌と平凡な歌とが生まれたりする所以である。

自立語と付属語を合わせて考察することは、1首全体の表現の組み立てを考察することに他ならない。したがって、1文がいかに組み立てられるかという、構文の把握が必要であり、1首が複数文から構成される場合は、各文がいかに1首に統合されるかという文章構成を理解しなくてはならない。これによって、初めて1首の表現が総体として明らかになる。

本研究の特色は、国文学の立場に立った、国文学と国語学(日本語学)の学際的研究にある。国語の体系化された一般法則を追究する国語学の成果を、個の表現を追究する国文学に援用することで、三代集の表現の展開を明らかにしようとする。

付属語や構文などは国語学の研究対象だ、とする立場もあるだろう。しかし、これまで成果を上げてきた歌枕や歌ことばは、国語学の語彙論・位相論などに、修辞は文法論に関連が深い。和歌文学研究も国語を対象とする以上、国語学とは無縁ではあり得ない。

一方、国語学における和歌の表現研究はどうか。国語学の目的は国語の一般法則の考察にあるからか、個別の場面(作者の人物像や歴史的背景も含む)は捨象されるのが普通である。しかも、考察の対象が勅撰集に限られることがほとんどである。これは、表現の個性を追究するには不十分である。

とすれば、和歌の表現研究には、国文学と国語学の学際的交流が不可欠と言わざるを得ない。そこで、本研究は、国文学と国語学の学際的研究を目指す。

2. 研究の目的

古今集の表現として一括される三代集の表現を、助詞・助動詞・構文・文章構成(文相互の関係)を観点として、その展開を考察する。

3. 研究の方法

研究の方法は、以下の手順を踏む。

(1)三代集と拾遺抄・後拾遺集所収歌の歌末語(和歌の末尾の単語、「年のうちに春はき

にけり/ひととせをこそとやいはむ/ことしとやいはむ」)・文末語(文の末尾の単語、「年のうちに春はきにけり/ひととせをこそとやいはむ/ことしとやいはむ」)のデータベースを作成する。

国語は、文末に用いられる語の性質で、文の内容や対象に対する作者の態度や判断を知ることができる。特に、和歌では歌末語にそれが顕著である。そこで、小松光三氏と秋本守英氏(1987)とは、八代集の歌末語を調査した。その結果、小松氏は、アリ系助動詞(動詞「あり」を構成要素とする助動詞)の優勢に、平安和歌の特徴を見いだした。加えて秋本氏は、アリ系助動詞とム系助動詞(助動詞「む」を構成要素とする助動詞)特に歌末の「けり」「らむ」が、古今集の表現を特徴づけるとした。

ただ、小池のこれまでの研究によると、古今集に多い題述構文による1文構成が複数文構成(一般に言う、句切れのある歌)に展開するところに、拾遺集における表現の特色の1つを見ることが出来る。よって、本研究では、文末語も調査する。

本研究は三代集を対象とするが、拾遺集の母体となった拾遺抄と、八代集の屈折点といわれる後拾遺集も、考察の対象に入れる。

本文は、最も一般的な『新編国歌大観』を使用する。歌末語は一目瞭然だが、文末語は解釈と関わるので、各注釈書や各種索引など先学の成果を十分に反映させる。

データベース作成の際に、以下の2点に留意した。

第1に、「たれしかもとめてをりつる/春霞たちかくすらむ山のさくらを」(古今集・春上・58)のような倒置である。これを1文として処理してしまうと、文末の助動詞を用例に採ることができなくなってしまう。したがって、「たれしかもとめてをりつる。春霞たちかくすらむ山のさくらを。」のように、2文として処理する。こうすれば、データから倒置が判断でき、倒置の観点からの考察も可能である。

第2に、「春霞なに隠すらむ/桜花/散るまをだにも見るべきものを」(古今集・79)のような倒置による鎖型構文(「(A)その手は(B)桑名の(C)焼き蛤」のように、AとCは直接関係がなく、AとB、BとCとがそれぞれ連なることで統一される文(塚原鉄雄氏)である。

例歌は、第3句が第1・第2句と倒置の関係で「隠すらむ」の目的格となり、下句には「散る」の主格となる。「桜花」は全体の題目でもあり、Bの場所に位置することで焦点化されている。こうした構文の例歌は、1文とも2文とも3文とも理解することが可能である。後でどのような形からでも考察できるように、3文としてデータ処理する。

(2)古今集の表現の展開を考察する上で有効と予測される構文を抽出する。

計画の段階では、主に以下の構文に注目し

た。

題述構文

(例) 久方の雲のうへにて見る菊は あまつほしとぞあやまたれける(古今集・秋下・269)

接続構文

(例) 佐保山のははその色はうすけれど 秋は深くもなりにけるかな(古今集・秋下・267)

倒置構文

(例) ちはやぶる神世もきかず。竜田河唐紅に水くくるとは(古今集・秋下・294)

鎖型構文

(例) 秋の野の草のたもとか、花すすき、ほにいでてまねく袖と見ゆらむ(古今集・秋上・243)

(3) 抽出した構文について、三代集での変遷を考察することにより、古今集的表現の展開の一端を明らかにする。その際、万葉集と後拾遺集とを視野に入れて考察する。

4. 研究成果

本研究の成果として、以下の点を挙げることができる。

(1) 三代集と拾遺抄・後拾遺集所収歌の歌末語・文末語、および句切れのデータベースを私家版ながら作成した。

八代集の歌末語索引はこれまでにあったが、本データベースによって、文末語の検索と、それに伴う句切れの検索が、三代集と拾遺抄・後拾遺集に限ってではあるが、容易になった。

これによって、古今集的表現の研究を効率的に行うことが可能となった。

(2) 当初は、文末語・歌末語の助詞・助動詞に着目して、古今集的表現の展開を見るにふさわしい構文を抽出する予定であった。しかし、データベースの作成において文末語を認定することが、同時に句切れ(文の切れ目)を認定する作業にもなったため、本研究では、句切れにも注意が向けられることとなった。

このことから、最近盛んとは言えない句切れ、特に初句切れの考察をすることができた。これは、文章構成を観点とした考察となる。

そこでは、以下の点を明らかにした。

古今集から後拾遺集の初句切れの典型は、初句が体言を含まない述語文節1つで構成される、要求文か感動文かであり、第2句以下が初句の用言の対象、内容となる。

述語文節のみで成り立ち、体言を含まない初句は、第2句以下で示される述語の対象や内容に、焦点を絞ることになる。また、初句の強い情意は、全体の印象を決定づけることにもなる。

初句切れは、新古今集でその成熟を迎えるが、初句切れの典型となる要求文と感動文とが、新古今集のように7割程度になるのは、拾遺集からである。また、新古今集の初句切れの典型例に、第2句以下が体言止めになる用例がある。こうした用例が初めて出てくる

のが、後拾遺集である。こうした点から、後拾遺集の頃には、新古今集の初句切れの原型ともいうべきものができあがっていたと考えられるだろう。

(3) 古今集的表現の展開を考察する上で有効と予測される構文である、助動詞「らむ」を句切れとする歌の典型の1つである、倒置的な歌(「……らむ。……」)の変遷を明らかにした。

助動詞「らむ」を取り上げたのは、すでに先行研究によって、歌末の「らむ」が、古今集の表現を特徴づけることが明らかになっているからである。また、倒置については、万葉集から王朝和歌、そして中世和歌へと移り変わりが明快な、題述関係の倒置について見た。

その結果、以下の点を明らかにした。

万葉集で中心となる4句切れの組み立ては、初句から第4句までを背景として、焦点となる結句に詠嘆が込められるというものだった。しかし、古今集や後拾遺集では、前の句と後の句とが、解説と主題の対応であるとともに、推量の対象と既定の事態の対応でもあるという関係に変化する。ここでは、3句切れが中心になる。

後拾遺集では、歌末が係助詞「は」の用例と体言の用例とに分かれるが、新古今集では歌末に「は」がある用例は1首しか見当たらない。体言止めは、新古今集の特徴的な文体だから、後拾遺集は新古今集の前段階と位置づけることができる。

の観点からすれば、古今集の「なきわたるかりの涙やおちつらむ / 物思ふやどの萩のうへのつゆ」(秋上・221)は、新古今的な文体・表現を先取りしたもの、新古今的な段階に既に到達しているものと位置づけられる。

この歌が古今集的表現・文体からはずれたものであることは、読み人知らずで撰者時代のものではない可能性が高いこと、同様の文体・表現の「うばたまのわがくるかみやかはるらむ / 鏡の影にふれるしらゆき」(物名・460)が、物名の歌で貫之集所収の歌と比較すると、明らかに物名のために作られた、その意味で作為的な歌であることからわかる。そして、この歌が新古今集的な文体・表現に馴染むものであることは、定家が高く評価したことからも理解できる。

(4) 三代集それぞれに特徴的な場が、同一の表現形式の用法の傾向に差異をもたらしていることを、「疑問詞……らむ」の構文を通して明らかにした。

具体的には、以下のとおりである。

古今集の「疑問詞……らむ」は、場の規定を排除したところに成立する回答不要、就中「謎づくり」の創作に特徴がある。

和歌の公的な位置づけを意図した古今集は、一首をその作品自体で完結した和歌として鑑賞しようとする。そこで、一首の自立性、完結性を保持しようとする。とすれば、「疑問詞……らむ」の歌も、自ずと回答不要、つ

まり回答を求めなくてもそれ自体で完結した作品が多く入集することになるのである。

贈答歌の多い後撰集では、「疑問詞……らむ」は、贈答という場に成立する傾向が濃厚で、回答を想定、要求する歌が特徴的である。そして、古今集の回答不要では自問の表現となる「疑問詞……らむ」が、後撰集の回答可能の贈歌では問いかけの婉曲表現となり、答歌では相手に反発し、作者に引きつけた回答を迫る、反語表現となる傾向がある。

拾遺集では、詠嘆性を帯びた祝意を表す「数量・程度の疑問詞……らむ」を、賀宴、特に拾遺集の場に特徴的な屏風歌の特色として指摘することができた。「数量・程度の疑問詞……らむ」は、自ずと無限の数量・程度を想起させ、賀宴にふさわしいものである。(4)「なりけり」構文のうち、「……は、……ものなりけり」「……ものは、……なりけり」という題述構文の用例数を、八代集で調査した結果、拾遺集が最も多い。秋本守英氏(1970)・糸井通浩氏(1978・1981・2013)らの先行研究から、「もの」は理法を表すことが指摘されている。理法(一般化)の表現が、古今集の表現の特徴であることは、森重敏氏(1967)などが指摘するところである。とすれば、理法の表現において、拾遺集で一つの頂点に達したと見ることができる。

これについては、本研究後に採択された科研費補助金研究において、引き続き考察を進めている。

なお、これまでの記述からわかるように、当初は万葉集も視野に入れながら、三代集(拾遺抄も含む)に加えて、後拾遺集を資料として考察する計画だった。しかし、実際に研究を進めると、新古今集までを視野に入れることとなった。これは、和歌史のあり方からいって、必然の結果であった。

また、研究成果を発表する中で、こうした方法は勅撰集以外にも、歌人の表現上の個性を明らかにするのに有効ではないかとの評価を得た。

そこで、本研究は、本格的に新古今集までを視野に入れた研究へと進展するとともに、私家集の表現研究にも拡大することとなった。これを研究目的として、引き続き科研費補助金にも採択された。私家集については、国語表現を専門とする研究者と、『大江千里集』の注釈がすでに開始している。

引用文献

- 秋本守英、古今集の文法、国文法講座、4、明治書院、1987、77-111
秋本守英、「なりけり」構文統貌「ものは」の提示を中心にして、王朝、第3冊、1970、59-89
糸井通浩、「こと」認識と「もの」認識 古代文学における、その史的展開、論集 日本文学・日本語、1上代、角川書店、

1978、265-284

糸井通浩、基本的認識語彙と文体 平安和文系作品を中心にして、国語語彙史の研究、2、和泉書院、1981、45-71

糸井通浩、日本語の哲学 その1、日本語文化研究、第18号、2013、19-40

小松光三、国語助動詞意味論、笠間書院、1980

塚原鉄雄、国語構文の成分機構、新典社、2002

森重敏、文体の論理、風間書房、1967

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小池博明、初句切れの表現構成 古今和歌集から後拾遺和歌集まで、表現研究、第98号、2013、31-40、依頼原稿

小池博明、三代集における「疑問詞……らむ」の場と表現、二松学舎大学人文論叢、第98輯、2017(掲載予定)、査読有

[学会発表](計3件)

小池博明、初句切れの表現構成 古今和歌集から後拾遺和歌集まで、創設50周年記念表現学会第50回全国大会、2013年6月2日、愛知県産業労働センター(ウインク愛知)、依頼発表

小池博明、王朝和歌の助動詞「らむ」と句切れ 三代集と後拾遺和歌集、日本文体論学会第107回大会、2015年6月28日、杏林大学

小池博明、三代集における「疑問詞……らむ」の場と表現、信州平安文学研究会9月例会、2016年9月17日、上田女子短期大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

小池 博明(KOIKE, Hiroaki)

長野工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号：30321433